（様式２）

２０２６年度 ＳＹＬＬＡＢＵＳ　【博士後期課程】

授業科目名	総合演習Ⅲ「企業・産業の実証分析」	
担当教員名	河野　秀孝、生田　泰亮	
ディプロマ・ポリシー（DP）との関係		
DP1	DP2	DP3
	○	

科目のテーマ	産業は、マクロ経済とミクロ経済の分析上の接点でもあり、またその産業の生産活動の主体として重要なのは企業である。需要面からの活動の主体の中核である人や世帯は、企業を経由して、その需要を顕在化させ、生産活動に結びつけることができる。このように現代経済は分業と迂回生産によって特徴付けられる。 国民経済計算や産業連関表によれば、財・サービスの最終需要は、人や世帯の消費の他に、企業の投資需要から成り立っている。また生産では中間投入の重要性も見過すことができない。このように、企業と産業は、経済を観察するときの最も基本的な対象であると考える。 本演習では、まず特定の企業の事例をもとに、その産業の特徴を探りながら、企業がどのように市場経済下において、事業活動をしているかを学習する。次に、企業が存在している経済システムは、全体としてどうのように機能しているかを理解することが本演習のテーマである。
科目内容・方法等	本演習では、学生の興味のある論文テーマを考慮しながら進める。まず、企業はどのようにして市場に存在し続けることができるのか、どのように事業活動を展開しているのか、という経営的観点から履修する。 次に、企業が存在している市場環境は、全体としてどのように機能しているか、またどのようなフィードバックメカニズムがあるか、という経済的観点から授業を進める。 以上のように、この演習内容は、経営的観点と経済的観点の双方から、我々が住んでいる経済社会を理解することである。

到達目標：

この演習では経営的観点と経済的観点の双方から､我々が住んでいる経済社会を理解することが到達目標となる。観点が違えば、分析の対象も自ずと異なってくる。

例えば、実業家としての経営者は、所与の経済システムの中で、いかに業績をあげるかに専念するであろう。経済政策担当者は一国の経済システムが全体としてどのような相互依存関係にあって機能しているか、どの部門が機能不全になっているか、どのような経済対策が必要か等に興味を持つであろう。

このように､双方の分析の観点と目的の相違に着眼し、日々活動している企業や経済社会全体の仕組みを理解することは、将来、起業家や政策立案者を目指すものにとって必須の要件であると考える。

評価方法及び評価基準： 評価方法及び評価基準：前半と後半の成績の合計から、以下の基準で評価する。 A 評価: 授業内容を応用できるのみならず、批判的にとらえることを含めて、当該理解をさらに発展させられること。80 点以上。B 評価: 授業内容を応用できるのみならず、批判的にとらえることを含めて、当該理解をさらに発展させられること。70~79 点。C 評価: 授業内容について、概ね理解していること。60~69 点。F 評価：授業内容の理解度が不十分。60 点未満。
授業の方法： 授業は学期の前半と後半からなる。まず、個別企業の経営的観点から、企業ケースメソッドによる産業分析をする。次に、経済的視点から、まず経済全体を考える国民経済計算概念による産業概念と、産業連関表の特徴を理解する。次にその発展応用として、応用一般均衡の基礎を学ぶ。